

めさまし草

154  
6  
827

梅園女史編輯

4658

特6

9

088121-000-9

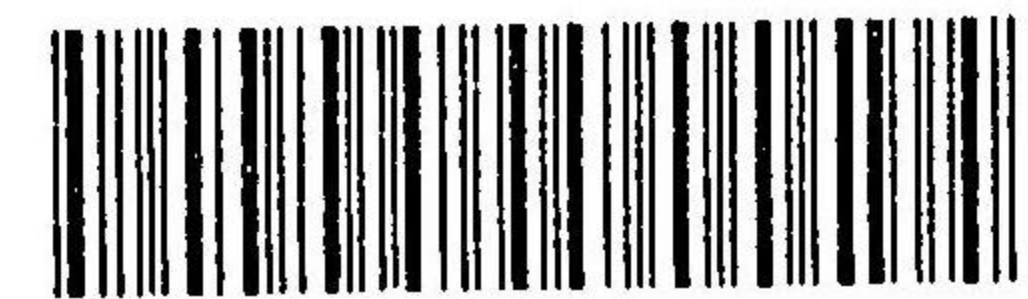
特64-949

めさまし草

梅園 女史/編

M24

DBG-0219





めさまじ草序

淑女……窃窕にして君子の好仇たる梅

蘭女史抑も何處の人たるを詳にせず昨日

厚知の紹介を以て余に謁を請へり散人生

増不在なりしかば女史は其編著なる一小

冊子を留めて去られたり題してめさまじ

艸と云ふ披ひて是を見るに奇詩妙歌總て





是れ新体の作なり一誦の下直ちに余をし  
 て其題號の大に適せるを稱譽せしむ乃ち  
 江湖の諸君も御試験の爲め枕頭必ず一本  
 を備へられ春曉のめ。さ。ま。し。に用おられて  
 は如何と梅園女史の頼みもなきに一筆茲  
 に落書する者は東都の粹客飄々散史なり

明治二十四年四月廿日 於東都城北之僑居南窓軟風之處

めさまし草

目録 十九題

忍耐の歌	五丁
自由の歌	六丁
佛國艸命の詩	十丁
日本魂	十一丁
ロンクフエロー氏人生の詩	十三丁
犬の迷懷	十五丁
玉緒の歌	十七丁
楠正成遺訓の歌	十八丁
山居	十九丁

特64  
949



朝顔の花に寄せ學童を獎勵す

四

二十丁

四季の月

二十一丁

四時の曙

二十二丁

拿翁を詠す

二十三丁

美人乘馬の圖に題す

二十四丁

學友の墓を吊ふ

二十五丁

長歌

二十八丁

小楠公を詠する詩

二十九丁

ゴリツヘルの立像の前に

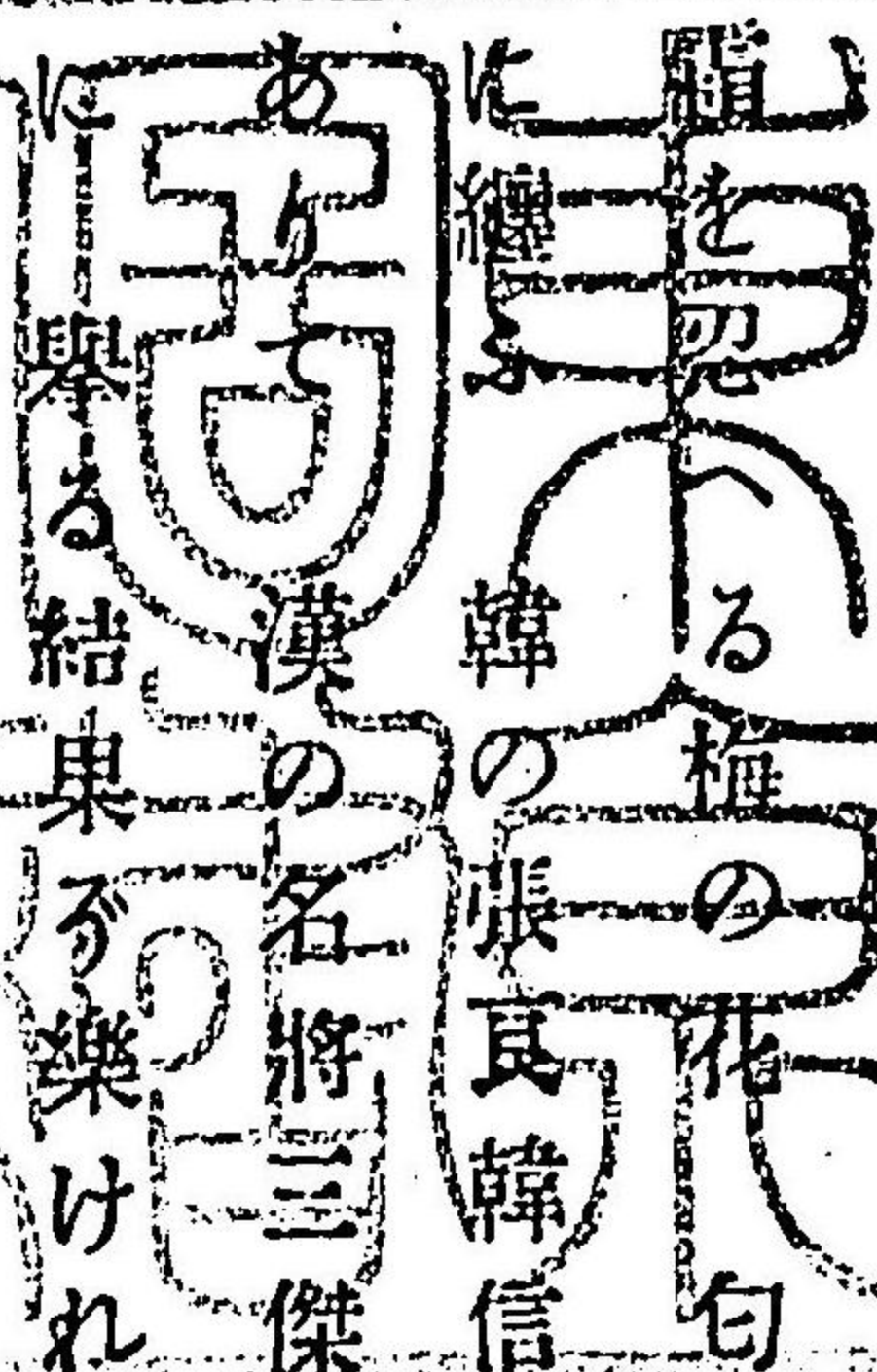
三十一丁

記名の歌

# めざまし草

梅園女史編

忍耐の歌



脂を忍へる梅の花 句を送る春風に 赤き心を顯して 錦の衣身に纏ふ

韓の張良韓信も 忍の一事を身に修め 忍ひ堪ゆるたけ

漢の名將三傑の 其烈士にう加へられ 高名手柄を竹帛

に 擧る結果を樂けれ 擧る事こそ譽なれ 我日の本の太閤や

佛蘭西國の拿翁 皆賤士にてありぬるも 勉め忍ひて勳功を

外國までも輝し 今に其名の消へせて 譽ぬ者こそなかりけれ

感せぬ人こそなかりけれ 以太利國のコロソス 尋嶼の爲に

幾月の 艱難辛苦のかひありて 終よ一の世界をは 見出す事を



快よし尋ね出すこそ愉快なれ」 文明自由の名も高き 合衆國の  
 其むかし 十三邦の者共か 英の羈絆を脱せんと 必死の力を奮  
 出し 長の年月忍耐に 虎口を逃れて獨立の 目出度國と曰はる  
 らも 本はといへば忍耐す 忍耐強き結果に 如何なる事をも  
 成得べし 如何なる業をも成得べし 大業なさん大丈夫は 強め  
 や強め忍耐を 爲るころ信の大丈夫なれ 爲るこそ人の務めなれ

○自由の歌

天よは自由の鬼となり 地には自由の人たふん  
 自由よ自由やよ自由 汝と我がその中の  
 天地自然の約束ろ 千代も八千代も末かけて  
 此世のあらん限りまで 二人か中の約束を  
 いかにかそ讎に破るべき さに去なから世の中は

月に村雲花に風 儘になふぬ人の身ろ  
 話せは長い事なから 古し羅馬の國と聞く  
 ろの人民を自由にし 共和の政治を立てむ爲め  
 數多の人のうき苦勞 それをも知らで慾の爲め  
 我權勢を張ふんとて 再帝位に登ふんと  
 企てたりしシーサルの 其親友の手にかゝり  
 議員の中に殺されたり 其親友の云ふ事に  
 我の羅馬を愛するは 親友よりも甚し  
 羅馬の民の望なら 我身も茲に諸共に  
 捨る命はいと易し 佛蘭西國のルイス帝  
 自由を壓制なさんとして 種々よ手段を廻せと  
 邪道は如何に正道に 打ち勝ことなるへきぞ



民の怒の火の如く  
 又洪水の溢れ来て  
 岩をも砕く勢ひに  
 いと長くも帝王の  
 黄金をかさす冠は  
 断頭機械の上に落ち  
 わはれ墓なくなりぬるは  
 誰を怨みん壓制の  
 自業自得と云ふ可れ  
 英吉利國の革命も  
 同し車の一つ轍  
 昨日の王は今日は賊  
 コロンウェルか手に持し  
 自由の旗の招きには  
 天をも回らす計りにて  
 チャーレス王を誅戮し  
 自由の基を立てたりき  
 北亞米利加の合衆國  
 むと英國の民なれど  
 其發端を尋ぬれば  
 自由の人となりたさよ  
 古郷のなごりに氣をとめす  
 深山荆棘はまた愚か  
 人のふみてしこともなき

青海原を打ち渡り  
 見も知りもせぬ亞米利加へ  
 殖民なせし心根は  
 いかに哀れに思ふらん  
 然るに猶も英吉利の  
 ほだしの綱は離られず  
 暴君汚吏の壓制に  
 語り語りて國の爲め  
 義兵を擧ぐるときかふに  
 我後れしと親も子も  
 死ぬる覺悟て七年の  
 長の月日の攻め守り  
 遂に敵をば追ひ拂ひ  
 目出度立てし獨立國  
 ワシントンの名に負へる  
 都と共に榮へ行く  
 國の譽や勇ましき  
 嗚呼彼と云ひ此と云ひ  
 自由の爲まは昔より  
 幾多の人の生別れ  
 又死わかれするものを  
 我東洋の人ちやとて  
 土地に變はあるなれど  
 などか心に變るへき



人の自由と云ふものは 天地自然の道なるを  
 勉めよ 勵め 諸人よ 卑屈の民と云はるゝな  
 余此文をかきればる 時しも 春の夢 枕  
 眠をさます 鐘の音 いともさやかに聞へける

### ○佛蘭西國革命の詩

嗚呼吾々の佛蘭西の 革命の史を讀む毎に 眉を顰めぬ時ろなき  
 壯麗繁華の美を極め 盛を盡せし巴里府も 今日にはさながら釜  
 の湯の 沸きかへりつゝ、一場の 修羅の巷を現して 最哀れにも  
 昨日迄 深宮の中に養われ 風花雲月それならで 世の憂きこと  
 は知らま弓 入るも出るも輝ける 玉の車に打乗りて 自ら社界  
 上等の 位置を占つゝ世の民を 塵や芥と見過せし 公子や貴女  
 の首や足 各々處を異にして 血潮の中に狼籍し 目もあてられ

ぬ有様を 見向もやらず一齊に 自由の讐を打てや打 今此讐を  
 平けて 一は祖先のなき靈の 恨を地下に慰めん 二は子孫の  
 身に掛る 後の患を除かんと 叫ひつ呼つ大丈夫か 自由の帽を  
 赤に染め 血を見て勇む佛人の 氣象を此に現せり 嗚呼佛人よ  
 佛人よ ルイ十六世の汝等か 君とし仰き奉る 貴き人には非る  
 か 其万乗の君王を 斷頭場へ殺したる 其有様は何事ぞ 左は  
 去なから之も亦 佛蘭西累代の帝王か 壓制と云ふ機械にて 民  
 の膏を絞つゝ 侈の花を咲せたる 罪の結果と知られける

### ○日本魂

日本魂あるものは 忠義の道に忘るゝな 日本魂あるものは 忠  
 義の道は忘るゝな 熟々思ひめぐらせは 最も畏き天皇に 仰け  
 は尊し千早振 天照神の大皇胤 今に至るも連線と 變りしこと



は絶てなし 斯も日出度大御國 いきどしいける眞素良男は 唯  
 身にもてる誠心を 我が大君に盡すべし 是る日本の心そへ 是  
 る日本の心そへ」 日本魂あるものは 忠義の道は忘るゝな 日  
 本魂あるものは 忠義の道は忘るゝな 若しも日本の國內に 寇  
 なす悪魔ありもせば 假令火の中水の底 彈丸兩飛の其間 劍の  
 山のその上も 躡躡ふ事にあらずして 命のあふんろの限り よ  
 せくる悪魔打拂ひ 拂ひ清めて大君の 御心安くまゐらせよ 是  
 る日本の心そへ 是る日本の心そへ」 日本魂あるものは忠義の  
 道は忘るゝな 日本魂あるもの 忠義の道は忘るゝな 君の惠  
 に酬ひんと 五の聖文銘肝して 一寸の暇も忘れずに 夜を日に  
 つきて武を研き 文を勵みて諸物の 條理々々をあきふめて 明  
 來る二十三年の 國會開ける其時に 我が日本の威光をは 外國

までも輝かせ 是る日本の心そへ 是る日本の心そへ

### ○人生の詩

ろも靈魂の眠るのは 死ぬと云ふへきものそかし 人の一生夢な  
 りと 哀れなふして歌ふなよ 眠らにや夢は見ぬ者ぞ 此世の事  
 は何事も 夢と思へと左にあらず」 人の一生夢ならず 最と慥  
 なる事そかし 人の終は墓なくも 墓に埋るものならず 土より  
 來り又土よ 歸ると云ふの肉体を そりや靈魂の事ならず 此世  
 に在りて樂むも 又苦むも固と人の 世に有る趣意に有さらん  
 生るは役も立つ爲る 日毎々に怠らす 今日に今日丈一日の  
 功を立ぬはならぬぞよ」 光陰實は矢の如く 藝道いとも易から  
 す 心は如何猛くとも 墓なく進む葬禮の 送葬太鼓打つ胸は  
 音止めされたる太鼓の音 此世の中の戦争ろ 其戦争の中に居て



人に生れた甲斐もなく 人に使はれ追はれつゝ あゆむ羊や牛  
 たるな 人よ劣らす憤發し 功名手柄なすへきそ 如何に樂し  
 く思ふとも 未來は當にすへからず 如何に嬉しく有つるも 過  
 去は昔しに過し事 働くへきは現在る 其働を見る者の 胸の心  
 と天の神 豪傑輩の一生を 熟々思ひ運らすよ 生きて甲斐な  
 き者成そ 人に勝れし手柄して 稀なる譽得るならば 名は香し  
 く後の世に 永く傳て残るらん 其香しき名を聞かは 社會の  
 海に乗り出して 艱難辛苦の浪風に 吹き廻されて破綻して 助  
 け船さへあらぬ身を 氣を取直し憤發し 功名遂くる者あらむ  
 されは人々怠るな 暫時も猶豫する勿れ 運命如何につたなきも  
 心を落す事なかれ 撓ます止ます自若と 功名手柄なしつゝ  
 も 勤め働く事おせよ

○犬の迷懷

冬の夜なかの月黒く 林に叫ぶ木枯に  
 肌身裂かるゝ寒さをも 只一枚の藁しとね  
 敷て眠れと眠られす 夢を結めと結はれす  
 哀れ渚の捨小舟 見向ふ人も泣く計り  
 此に引換へ彼の猫は 絹の菌に身を置て  
 爐の傍に高駟き 夢暖く此夜をば  
 寒さも知らず過一行く 嗚呼神様は何事ろ  
 聞へませぬぞ神様へ  
 我の日頃の食物は 汁の残りや骨のくず  
 食ふて細くも命をは 續き留めては居るものゝ  
 坐敷の上へ一度とて 上りしことも荒繩に



首々られて門のわき 人の番する身の哀れ  
 彼れ何故ろ 鱈節や 旨き魚の身を添へて  
 三度々々の食物ろ それのみならず奥様や  
 娘の膝を枕して 春の景色の麗なる  
 庭の表の高樓に 居眠をする悪らしさ  
 嗚呼神様は何事ろ 同じ獸てありなかと  
 斯くまで幸と不幸とを 隔てゝ作る 其心  
 聞へませぬぞ神様へ  
 我は門邊に終夜から 番をすれ共賞られす  
 彼は會々鼠取り 其を遁せと叱られす  
 思ひ思へは思ふほど 何故幸と不幸とか  
 我と彼と又異なるか 世の諺又云はすかや

猫は三年蓄へはとて はや三日目て 恩忘れ  
 主に讐なす悪魔をい 斯く何故に愛するろ  
 嗚呼神様は何事ろ 聞へませぬぞ神様へ

○玉の緒の歌

眠る心の死ぬるなり 見ゆる形はおほるなり 明日をも知らぬ我  
 命 あわれ墓なき夢をかじ などと哀にいふは悪し 我命ころま  
 ことなれ 我命こそたしかなれ 墓は終りの場所ならず 人の塵  
 にて又散ると 云ふはからだの上の事 人の願は喜ひか 人の願  
 は悲みか 人の願はそれならず 唯怠らす働きて 今日より勝る  
 明日を待て 業の久しく時は馳す 強き胸だも亦堪へず 鼓の如  
 く打ちつゝけ 一日々々と近くなる 死出の旅をば速くなる 争  
 ひ多き世の中に 此身をよせて魁に なりて益々進むへし 言な



き啞となるなかれ 幸るも牛となる勿れ 如何に未來は樂しきも  
 いかにかに空しき過去なるも ともにこれをば捨て置て 我を忘れす  
 神を知り 働くへきは今日ばかり 勝れたる人世に多し 我とて  
 も人相同し 勉め勵めば斯くならん ゆめ怠らず務めなは 長く  
 残さん此名をば 海より荒き世の中に 舟失ひて浪の間に 獨り  
 漂ふ我友は 我名をきゝて勇まなん 我名を聞きて進まなん さ  
 すれば人は氣を張りて 事業ばかりに心して 如何なる進も事と  
 せず 高きに至れ馳せ行けよ 樂みあるを働けよ

○楠正成櫻井驛に正行へ遺訓の歌

建武の昔し正成は 肌を守りを取り出し 是は一歳都攻のありし時  
 下し給ひし綸旨なり 之を汝に與ふるなり 余は兎に角になる  
 ならば 一世は尊氏の世となりて 敵慮を惱まし奉らんは 鏡にか

けて見る如し さは去なから正行よ 父の子ならば流石にも 忠  
 義の道はかねて知る 弓張月の影暗く 家名を汚すこと勿れ 打  
 洩されし浪黨を あはれみ扶助し隱家の 吉野の山の奥深く 月  
 の桂は漣や 流れも清き菊水の 旗を再ひ翻し 敵を千里に逐ひ  
 退けて 敵慮を安んし奉れ 嗚呼敵慮を安んし奉れ

○山居(春夏秋冬)

廣き深山を庭と見て 眺むいほりの柴折戸よ おとなふ鳥も舞ひ  
 歌ひ 花に粧へる草や木は 霞の衣色取りて 文讀むうさを慰め  
 ん 榮へ向ふ春の山 いと堪へ難き暑にも 前に流るゝ谷水を  
 むすべば自つ涼風の 吹のにつれて村ろよく 岸の茂みに螢す  
 み 眺や添へん夕暮の 端居涼しき夏の山 月皓々と照り渡り  
 籬の薺もありくと 尾花の末に置く露を 玉と給く眞夜中の



嵐に散りし桐の葉は、ゆき來の道を埋るゝなり。いと、寂しき秋の山。朝とく見れば外の方へ。平一面の銀世界。飛かう鳥も白衣きて。木も又花を咲かし嵐。まはゆき光り當れども。とけぬ谷間の厚氷。實にいや寒き冬の山。

### ○朝顔の花に寄せ學童を獎勵す

庭の垣根の朝顔よ。朝な々に怠らす。咲とも盡ぬ其花の色と云ひ又形までも。同じ天地の恵にて。我等の目をは慰むる。深き心を白露の。干をも知らずで寐くたる。人こそ花に劣るらん。學の兒童よ此花に。負けず起出て機嫌能く。貌打洗ひ父母も。我身の無事を神に謝し。庭の面のひき掃除。襟や襖の拭きはらひ。怠たふぬ様つとめよや。やかて汝の實も花も。此朝顔にも勝るへし。庭の垣根の朝顔の。朝な々に咲く理由や。咲きたる花の其色

に。白と云ひ又赤青と。異なる原因や其外に。我等の目をは慰むる。心理の法や白露の。結ぶ作用を知らて過く。人こそ人の甲斐なけれ。學の兒童よ此問を。疑ふなれば躊躇せず。普通の學を疾く課へて。精神論や物理學。夫からそれと研究し。化醇の律をおきらめて。學士哲士と呼ばれた。幾春秋の年月を。樂しき中に送るへし。今を苔の汝の身。露の散る間も怠らす。勤めて徒に過るなよ。花によく似た苔の兒。苔に似たる學の兒

### ○四季の月

見渡せば。峰の櫻の花の香を。袖にうつして佐保姫の。織出す錦。八重衣。ながめつきせぬ。春の夜の。霞て殘る。有明の月。夕立の。すきにし庭の。池の面よ。花咲き染し。漣の葉に。うける白露。白玉の。上に宿れる。夏の夜の。高峰よ殘る。有明の月。



吹きすくる。尾花の風の。はてろなき。遠の野末のくさ村に。あつめ人もなく。鈴むしの。聲するまゝに。秋の夜の。うらにのこれる。有明の月」

野も山も。眞白に見へて。いと、しく。吹風さむき難波かた。浦邊にかれし。あしの葉に。さながら凍る。冬の夜の。うらにのこれる。有明の月」

○四時の曙

春の彌生の曙に 山邊は霞み野の煙り 花の罌を出る蝶に 董の床を起つ雲雀 何れ浮かれぬ物のなき 長閑の時を面白き」 夏の葉月の東雲は 月を宿せる露の蓮 水邊は秧鶏山邊には 青葉隠れの杜鵑 尙小籬を吹き透し 得も言はれざる風の味」 秋の文月の朝またき 啣ち残れる蛩の 聲も露けき權桓 垣根に纏ふ

薺の 萎まぬ間にと閨を出て 朝涼みせん飽む迄」 冬の小春のわけ空は 晴渡りたるなぎ日和 夜すから寒み覺へしは 霜や置きぬと悟りたり 軒の橘黄ばみなむ いざ閨出て、摘み見ん

○拿翁を詠す

昔より賤か家にそ生れきて 天下を握りし其人は 我國にては豊太閤 佛蘭西にては拿翁 嗚呼勇ましや豊太閤外國までも威を振ひ 唐土人をなて切りて 我か國光を輝し 末代までも其名をは三つ見にまでも知られけり 嗚呼勇ましや豊太閤 嗚呼畏しや拿翁 魯西亞或は英吉利よ 佛蘭西國の強さをば 書物の上に青々ど 後の世迄も傳へたり 嗚呼畏しや拿翁 魯國に進みし其後は 寒の爲めに餓の爲め 士卒は概ね斃れたり 今い如何なる英雄も 猶豫する間もあらされは 本國さして逃れたり 尋て巴



里は陥りて 其身はエルバの主となり 佛蘭西人の哀は エルバ  
の島へ傳へきて 又もや再舉の心をは 起したりしもウオトトル  
日上の 戦空く破られて佛蘭西人の信用も 今は全く地に墜ちて  
回復するも難しとて 合衆國に逃れんと 思ひ立ちしも既よ早  
や 其事をさへ成らすとて セントヘレナの一島に 流罪の身と  
は成り果たり 嗚呼畏しや拿翁 古今に稀なる英雄を 古今に稀  
なる英雄ぞ

○美人乗馬の圖に題す

號國夫人の朝參か 王照君の出塞か  
巴御前の出陣か うれかあらぬか知ふぬ共  
花のかんはせ柳の腰 月の黛雲の髻  
玉の駿輪に身を寄て 珊瑚の鞭を揮へども

黄金鍔のくつばみに 白沫噛みて足搔なす  
逞し氣なる駒さへも 心有りけに點頭きて  
最静やかに見へぬるは 雪を欺く軟手の  
手綱を把れるこぼれ香に 獸なからも魂消しか  
嗚呼觀る人よ心せよ 閉花羞月其人に  
乗り粉されて使はれて 嘶くことも能はざる  
例は古今に多はなるる 英名儉素の玄宗も  
拔山蓋世の項籍も 忠義智勇の義貞も  
楊姪に虞姫に尙當の 内侍と云へる御者の爲め  
日頃の驥足も縮み果て 乗り斃されしに非るか  
嗚呼觀る人よ心せよ 美人に引け取る驚馬たるな

○學友の墓を吊ふ



指折り沿へて數ふれば 君に別れて四年なり  
たどひ音信絶へし共 慕はぬ時のあるへきか  
遙々歸る故郷よ 君をたつねて草枕  
旅路につもる物語り 語らんものと思ひしに  
歸りて聞けは幸なくて 君ははかなくなりしとや  
小夜の嵐に散る花の 措むも甲斐はなけれど  
人に邁れ一才をもち 志さへ遂げ兼ねて  
此世を去りし其時の 心のうちのいたましや  
今夜は秋の初にて 月の光もさやかなり  
府中の市はにきはしく 往來の人の絶間なし  
昔のごとく手を取りて 袂すゝしく夕涼み  
過ぎ來し方を語りなば 如何にうれしき事ならん

思はさり覺我ひとり 小草の露を踏みわけて  
率兜波苦蒸す傍で 慕ひし君に遭んとは  
あなたの町に引かへて ことの野末の淋しさに  
吊ふ人もあらざるに 住めぬ都と思ふかや  
多の人の其なかに 別て親しき友垣が  
たづね來つるも草誘ふ 風より外に聲もなし  
聲は無れと君知らぬ 喜ふへきかさては又  
語り合はれぬ悲しさに 泉下のなげき増すへきか  
松濤庵の雨の夜の 灯火淡くなるまでも  
書篇に對し勉めたる 昔も今は夢と醒め  
晩香館の雪の曙 ありれ事業を世の中に  
たてなん事と勇ましく 誓ひしとも泡と消へ



我は吾妻にまよひて 身の成り出ん時もなく  
 君は此野の露と消へ 永く終を告げにける  
 悲しき哉や今こゝに 魂魄邊す術もなく  
 逢ふも逢ぬにいや勝る 歎きとこそなりよ  
 月の光のさやけさに 景色はいと絶なれど  
 心に愁ひある身には 是も哀のたすけにて  
 小草にすたく蟲の音の 泣くより外はなかり屍

○長歌

勉めはげめよ三千あまり 五百と萬の同胞よ  
 長き様でも年月の ひま行く駒のしはらくも  
 むのろ つらつら思ひめぐらせは 明治も既に廿四つ  
 過ぎにけり されど日本は半開の うちにありとて外國の 人に

指さし笑はるゝ 事をうしとや思ふらむ うしと思はゝ諸共に  
 夜を日よつめておのかしく 勉め勵めよ怠るな たどひ皇國は小  
 さくも 知識大きく學廣く あれ何とて眼にあまる 魯西亞英  
 吉利何のその ありとあらゆる國々を 攻むるに難き事あらん  
 左はさりなから人々よ 得やすき事も徒らよ 暮して得らるゝも  
 のならず 況て知識と學問は いとも得かたきものなれば 勉め  
 勵めよ怠るな 本なき枝に花さかし 花を美しくしめてたしと 思  
 はん人は願りみよ

○小楠公を詠する詩

嗚呼正成よ正成よ 公の逝去のこのかたの 黒雲四方に塞りて  
 月日も爲めに光なく 惡魔は天下を横行し 下を虚け上をさへ  
 慢り果てゝ上とせず 吹き來る風は腥さく 絶る間のなき人馬の



音 春は來れ共花咲かす 芳野の山は花見むと 訪ひ來る人は絶  
てなく 君か御代ころ千代千代と 囀る鳥の聲聞くは いつれの  
時に有なるや 嘆はしきの至りなり 嗚呼大君の御爲めに 振ひ  
起りて汚れたる 此世の塵を洗へんと する人どてい非るか 遠  
くあなたを見渡ば 金剛山の巍峨とて 雲の上迄屹立し 繁る  
林の木間より 見ゆる菊水其旗は 實にこそ國の寶なり 父の賜  
ひし此刀 腹を切れとの爲ならず 賊の頭を斬らせむ爲め 増さ  
も増し彼の賊等 國の讐なり父の讐 斬て捨てす置くべきや  
拂へは來る夏の蠅 頃正平戊子の春 熟ら思ひめくらせは 元  
來よわき此のかぶた 若しも病も胃されて 空しく失せし事な  
は 不忠不孝と誹られむ 討死するは此時ぞ 死出のなごりに今  
一度 願ひかなひて親面り 君の御影を伏し拜み 生きて歸れの

詔り 聞て切なる胸の中 哀れと云ふも愚かなり 書き残したる  
梓弓 引きて歸らぬ赤心を 誓ひしものゝ百餘人 雲霞の如き大  
軍を物ともせずと斬まくり 君の方をは枕して 討死せし潔よ  
く 勇ましかりける事ともなり 都も遠き村里の 女童に至るま  
下 忠臣孝子の鑑ると 譽る其名は香しく 天地と共に傳はらん  
天地と共に傳はらん

○記名の歌

後の世までも残さんと 濱邊の砂に我名をば 記せし後に來て見  
れば 寄せ來る浪の洗ひ去り 残さん跡も影もなし 後の世ま  
ても残さんと 野邊の檜に我名をば 記せし後に來て見れば 杣  
のかのこの切り去りて 残さん跡も影もなし 後の世までも残  
さんと 深山の石に我名をば 記せし後に來て見れば 地の震動



の碎去り 殘さん跡も影もなし 嗚呼誤れり我策は 情々思ひ  
運せは 實に眞實の言行は 是れそ我名の文字なり 世の諸人の  
心中は 是れろ我名のかき所 此かき所文字共に 揃ふて擧る英  
名は 千歳までも朽はせし 永久までも残るゝむ

あともまじ艸畢

假世私論 全

洋装美本  
正價廿五錢  
郵税四錢

如海 五味平五郎著  
梅岳 山田 清一 閱

形勢要論 全

洋装美本  
正價廿錢  
郵税四錢

◎ 該二著の出版 近日に在り 江湖愛國の士

さふ刮目し 之を待て



の碎去り 殘さん跡も影もなし 嗚呼誤れり我策は 情々思ひ  
運せは 實に眞實の言行は 是れそ我名之文字なり 世の諸人の  
心中は 是れろ我名のかき所 此かき所文字共に 揃ふて擧る英  
名は 千歳までも朽はせし 永久までも殘るゝむ

めとまじ艸畢

如海 五味平五郎著

概世私論 全

有所權版



洋裝美本  
正價廿五錢  
郵稅四錢

梅岳 山田清一 閱  
如海 五味平五郎著

形勢要論 全

有所權版



洋裝美本  
正價廿錢  
郵稅四錢

◎ 該二著の出版近日に在り 江湖愛國の士  
乞ふ刮目して之を待て



聖山迂史閣 ● 如海學人撰

有所權版

# 淚酒錄韻

全再版

定價拾二錢  
郵税金二錢

●魯大何物ツ清大何物ツ曰ク朝憲紊亂曰ク悖言逆行曰ク賣國曰ク失權曰名利曰  
●賄賂曰ク詭譎曰ク拐幼賣奴曰ク倫盜殺人曰ク悖倫曰ク不敬曰ク喜悅の  
●稀ナル均ク之レ能紛々亂麻ノ如ク何ツ夫レ可悲愁の物ノ多クシテ可喜悅の  
●物ノ相異何ソ其レ如此哉當此時余輩同胞タルモノハ畜ニ愁焉悲焉ノミチ以テハ  
●未タ其責ヲ盡シタルニ非ズ必之レヲ矯正改革スルノ方策ヲ講セザル可カラズ抑  
●モ條約改正ハ難事ニ非ラズ國權伸暢モ亦易々ナルノ要スルニ吾人各心膽ヲ練  
●リ其肺肝ヲ養ヒ精神ヲ興發シ斯氣ヲ振揚シ以テ事ニ當ルニアリ之レ實ニ淚滴餘  
●韻ノ刊行アル所以ナリ江湖愛國誠忠ノ士幸ニ一讀アラントチ

發行所  
取次所

浩然學會  
博約書院

東京市麴町區三番町  
六十三番地

明治廿四年五月廿五日印刷  
明治廿四年五月廿六日出版

定價金五錢

編輯兼  
發行者  
吉見渡島

東京市麴町區麴町三丁目十番地

印刷者  
高橋信定

東京市麴町區三番町六十三番地

發行所  
博約書院







